

福永武彦『秋の嘆き』論

A STUDY OF “AUTUMN SORROW”

BY FUKUNAGA TAKEHIKO

王 成*

Autumn Sorrow (aki no nageki) is a short story by Fukunaga Takehiko, first published in the literary magazine “Meiso” in November, 1954.

One of many experimental works by Fukunaga, who is regarded primarily as an avant-garde writer, this story is highly complex in both language and design. The reader is drawn into the solitary world of the heroine Sanae, whose brother died by his own hand one autumn night ten years earlier. In his depiction of her lonely existence, Fukunaga resolutely confronts “time”- here portrayed as a phenomenon of evil - and analyses in detail the interaction between time and fiction. In this paper I would like to consider the relation in the story between the structure of time and the development of the narrative.

In *Autumn Sorrow*, the author consciously denies the continuity of time by overlapping and intertwining past and present within the story, thus

* WANG Cheng 中國山東大学外国文学学部日本語学科卒業。北京日本学研究中心大学院修士課程終了。1993年10月来日、翌年4月立教大学日本文学専攻博士課程に入学。現在同課程在学中。主要論文は、「東洋近代化の探索－漱石と老舎との比較」（『日本学研究Ⅱ』科学技術文献出版社1992年10月）、「猫と風刺－『猫城記』と『吾輩は猫である』の比較」（『山東大学学報』（哲社版）1993年2月）など。

advocating to the reader a restructuring of time guided by the creation and judgement of reader and author. Fukunaga constantly shifts time from the present to the past in successive sentences, or even within a single sentence. I would like to examine the ways in which Fukunaga deals with these time-shifts.

Autumn Sorrow develops the theme of combining the chronological time of the story itself with the psychological time of the heroine, Sanae. I would like to examine the function of time and memory within the structure of the story.

Fukunaga sees creative co-operation between reader and author as the ideal component for construction of a story. To draw the reader completely into the world of the story, he has created not just an artificial time structure, but a story in which he measures the distance between the author, the characters, and the reader. In *Autumn Sorrow*, direct and indirect narratives are skillfully mixed, with dialogue expressed on the same level as the prose, removing the borders between the real world and the inner world of the characters, aiming at a single level for reader, characters, and author.

The principal motifs of the story are war, and the heredity of madness. The construction of the story, involving as it does the setting and solving of various puzzles, leaves the story open to numerous, many-sided interpretations.

福永武彦の『秋の嘆き』は雑誌『明窓』の1954年11月号に掲載された短編小説であります。小説は9節からなりますが、恋人の「麻野さん」と映画を見た晩から就寝に至るまでの主人公の早苗の行動を辿る現在時間と十年前の戦争中の兄の死を巡る疑問を中心とした過去の時間から構成されています。作品にお

いては、時間の持続を意識的に立ち切って、過去と現在を交錯させて組み立てることによって読者に時間の再構成を要請する方法が見られます。そこで、私の発表においては、作品における時間構成に焦点をあてながら物語の生成について考えてみたいと思います。

現在から過去への遡行

作品を読み終った読者にとってはその事後的な解釈的整理によって物語は整然となっているかも知れませんが、しかし、刻々と生起する物語の展開の過程においては現在と過去との錯綜した構成は必ずしも整然としたものに見えません。節と節の間でも、また、各節の中でも時間はさまざまのきっかけによって、現在から過去へ遡行させられています。ここで作品の中での現在から過去への遡行させる方法を検討したいと思います。

まず、主人公の早苗は現実世界のささやかな出来事をきっかけとして過去の記憶を呼び起こされています。叙述は早苗の意識の流れに即して、現在の時間を中断して、過去の物語に入り込んでいくのであります。

私には誰もいない、誰も甘える人がいない、と寝る前の化粧をしながら、早苗は呟いた。か細い声で虫の鳴いているのが聞こえて来た。兄が死んだのも秋だった。お通夜の晩には虫がしきりに鳴いた、と彼女は思った。

(3)

早苗は虫の鳴き声に触発されて、無意識に十年前の通夜の晩の虫の鳴き声思い出したのであります。同じ秋の夜という時間が重ねられ、十年という時間の幅は一瞬に消えてしまいます。早苗にとって現在と過去という自然的物理的時間の長さの感覚は無意識の中に自由に伸びたり、縮んだりするのであります。

でも私は生きる、と彼女は呟いた。悪寒はとまったが両足は氷のように冷たかった。兄さんが死んだのは秋だった。あの頃は寝ると足がすぐ暖まったものだ。私はスタンドの灯を点けて、目覚時計の針を気にしながら、いつまでも本を読んでいたものだ。電燈を消すと直に眠った……。早苗は

そういうことを思い出した。(9)

前の例は聴覚によって無意識の過去が呼びさまされたのに対して、ここの例では、早苗は「寒さ」という身体感覚によって秋の季節を意識した途端に、十年前の秋の夜の兄の死を連想します。こうして、現在時間と過去時間は瞬間の感覚に導かれて、交錯し、つながっているのです。

次は、現在時間節の物語の進行中に早苗の兄への語り掛け－内的独白－によって過去への遡行が仕掛けられることも見られます。つまり、全知的視点による客観的叙述の途中に主人公の内面に分け入って、その思考、独白、記憶が自由に表出されてもいるのです。

兄さん、兄さんはそれを知ったのね、知っていたのね、と早苗は心の中で呟いた。兄さんが人が変わったのは、私たちのお父さんが狂人だったことを知り、その同じ血が自分たちの中にも流れていることに気がついたからなのね？(略)

早苗はその頃の兄の表情を思い起こした。あの暗い、陰気な眼指。兄さん何を考えているの、そんな深刻な顔をして？そう早苗が訊くと、宗太郎はふっと気を取り直したように、早苗の顔を見て笑った。(9)

このように、現実には側にいない兄への語り掛けを通じて、早苗が現在から過去を往来するにつれて、読者にも彼女の時間を整理しながら物語を読みすすめられるのであります。

読者への語り掛け

小説家の技術が読者に単なる物語の傍観者たらしめずに、否応なしに作者の世界に連れ込むほどに強力であり、読者がその小説の読後に、自分でも一種の創造的な力を感じ、作者と作中人物と読者が魂の律動を共有して、謂わば三位一体の関係を生じることが最も望ましいと思う。

(「毎日新聞」昭和39年8月9日朝刊)

ここで分かることは、福永武彦は常に読者の想像力と協同作業を小説創作の理

想としていることであります。小説に読者の参入を要請するために、作者と作中人物と読者の距離を計りながら作品の文体を工夫しているのです。この『秋の嘆き』においては、直接話法（He-, “I-” のように、二つの人称になる）と間接話法（He-that he- のように単一の人称からなる）とを見事にミックスさせて、現実世界と作中人物の内面世界の境界を量して、作者と作中人物と読者との三位一体を狙う意図が見られます。本来の三人称小説の心理描写は語り手によって語られますから、作中人物の会話は引用符を用いて、地の文と会話文が書き分けられています。しかし、この小説は地の文と会話文は形の上では、同じレベルで書かれて、会話文も地の文化とされています。

I からかったり甘えたりする時に、時々、宗ちゃんと呼んだこともある。兄は怒った。早苗、増長するとこれだぞ。拳固をつくって眼の前で振り廻した。早苗は笑った。宗ちゃんの馬鹿、お兄さんなんかにはぶたれないわ。そうするとやっぱりお兄さんと呼んでいたのだ。（1）

II 親戚の家では若い従妹が、早苗の帰りを待っていた。二人は一緒にお茶を飲み、早苗は見て来た映画の筋などを話した。私も見るわ、とても面白そうね、と従妹は叫んだ。誰におごらせてやろうかな。洋裁学校に通っている従妹は、二三人のボーイフレンドの名前をあげた。（3）

例Ⅰは早苗の内面に即して、早苗の記憶の中の兄とのやりとりを復元した場面であります。この文章の中の早苗と兄の会話は引用符が取り除かれています。本来、直接話法として表現する会話文を語り手による地の文に混在させ、語り手と作中人物とが一体になって、記憶の中の会話が読者に向かって語られています。作品内の聞き手向けの言葉が、直接、読者にも向けられ、あたかも、読者を作中人物化しているようです。

例Ⅱは三人称の語りの中で「私も見るわ、とても面白そうね、と従妹が叫んだ。」という文は直接話法の特徴を保有しています。「私も見るわ」という文は直接に読者に話しかけるような形で、読者を引きずり込んで、作中人物との距離を感じさせないようにになっています。しかし、三人称の「、と従妹が叫んだ」

という部分では、今まで身近に作中人物と対面していた読者が三人称部分を呼んだ途端に突き放されて、作中人物との距離を感じるようになっていきます。

同じように、手紙という言葉そのものの提示も読者と作中人物との協力関係において、物語の構成に大きな役割を果たしました。十年前自殺した兄が遺した置き手紙は謎のままになっています。その内容を知りたくても知ることができなかった早苗は十年後、恋人の麻野さんの置き手紙によってその謎を解かれるのであります。作品の謎掛けと謎解きにおいて手紙はそのいずれにも使われていました。これによって、作品のミステリー性が鮮明に印象づけられるのであります。

錯乱した眼に、兄の机の上に封筒が置いてあるのに気づいた。それは机の真中にきちんと置かれていた。しかし彼女がかかりつけの医者を連れて家へ戻って来た時、その封筒はなかった。(4)

あの封筒の中に書かれてあったのはどんなことか。(4)

封筒の中身についても言葉を濁してしまった以上、早苗が自分の周囲に信じられるものを持たなくなったのは当然だった。(5)

その時彼女がごちゃごちゃした中身の中に一枚の小さな角封筒があったのに気がついた。(略) 彼女はハンドバッグを足許に置き、立ったまま封筒を開いて中の手紙を読み始めた。(5)

この封筒は、秘密を封じ込める機能を強調され、謎の記号として作品の中で動いています。早苗は「あの封筒の中に書かれてあったのはどんなことか」という疑問を抱いているように、読者も此の封筒の謎の反復によって、兄の置き手紙と自殺の謎と結び付けて、読みを進めるのであります。その早苗の回想に即して語られた4節と5節で封筒の話がいったんとぎれた時点での麻野さんの置き手紙の出現は、読者の興味を呼び起こさずにはおかないのであります。しかし、いったん時間は中断され、6節の過去における母の死と置き手紙が行方不明になる経緯が語られています。この過程を経過して、7節では麻野さんの手紙が全文引用され、兄の死の謎を解く方向に物語が展開されています。読者

は新しい事実の上の物語の展開に注目しているのであります。読者も早苗と同じように受け止めるのであります。書簡文体のこの真実らしさを生かした7節では、今まで伏せられていた謎を読者に直接、謎解きするようなりアルな効果が生まれているのであります。

作中人物の時間と読者の時間

小説の書き出しは歴史的時間枠を「早苗の兄が死んでからもう十年が過ぎた」というように十年間の時間枠に設定します。創元社から出版された短編集『心の中を流れる河』にはじめて収録された時、作者が扉の頁に「1954年10月作」と書いた創作の時期が作中の現在時と一致するとすれば、兄が自殺した「十年前の或る夜」とは1944年の秋になるわけであります。歴史的に見れば、学徒出陣の開始は1943年の10月であります、1944年10月18日陸軍省が兵役法を改正して満十七歳以上を兵役に編入することを決定しています。母が学徒出陣で取られることを心配していたが、召集を前にして兄が死んだのがその1944年だったのであります。そうした、現実の歴史的出来事はおそらくかなり多くの同時代読者の記憶に依然として生々しく焼き付けていたはずであります。そうした読者にとっては、早苗の兄の自殺をめぐるドラマは今日の読者の想像をはるかに超えた、悲劇的且つ深刻なドラマとして受け止られたはずであります。

読者は早苗の現在と過去の往復に連れ込まれるにつれて、自身の個人的時間を重ねています。そのように、読者に自らの時間を往復させながら読ませるのが作者の狙いであります。早苗の兄の死の原因は明確に書かれていませんが、父の狂死に遺伝の恐怖を感じて自殺したと早苗は推理しているのであります。しかし、戦争中の狂気に対する囲い込みを検討すれば、人々の狂気の遺伝に対する認識は今の想像に及ばないほど深刻な問題でした。こうして、読者の中で、周囲の人々が当初想像したような、戦争拒否による自殺という解釈から、狂気の遺伝を恐怖しての自殺という解釈へと、早苗の独白に導かれて、読みが移動させられていくことになります。

戦時下という時間を考えてみる時、日本ナショナリズムからファシズムへ移行する過程において、狂気に対する囲い込みや非人間的な政策が実施されたことが分かります。その中で特に注目したいのは1940年5月に公布され、翌1941年7月から施行された「断種法」ともいう「国民優生法」であります。この法律によって精神病を遺伝病と断定して、精神病を含みいわゆる遺伝病患者を断種の対象とし、非人道的な「優生手術」を施すことが決定されたのであります。このような「断種法」と並行して、マスコミにも「遺伝と犯罪」をめぐって次のような記事が載っています。

（大井町の姉妹殺傷事件は）、遺伝性の精神病である精神分裂症がそうさせたに違いないと思われます。またいま追求中の渋谷の「通り魔」事件は誰でも考えるように病的性格たる変態性欲者の仕わざと推定されます。事変下にこんな事件が多いのは困ったことですが、これをすべて長期戦による「環境」に原因を帰するのは過っていると思います。心身喪失者といつて強度の精神病者や白痴などが犯罪を犯しながらも、責任能力がないゆえを以て不起訴になるものが毎年六、七〇名はあります。

（「読売新聞」昭和15年2月28日朝刊）

結論として「優生法」の実施の必要性を訴えるこのような記事をみても、遺伝性精神病の恐ろしさがいかに広く受け入れられていたかが分かるのであります。

今川勲氏の『現代結婚考』によりますと、「断種法」を実施する前に、日本では「初めてと言われた全国的な精神病の遺伝家系調査が1939年6月実施され、その調査の結果が、1940年2月厚生省から発表された。それによると、調査は精神分裂病、そううつ病、真性てんかん、内因性精神薄弱の4部門を対象として行われたが、両親が患者であった場合、子どもが同一の病気にかかる率はほぼ100パーセントに近いというものであった。片親だけの場合でも、子どもの罹患率は親がまったく病気でなかった場合の子供と比べて、何十倍から何百倍の率で同一の病気にかかることが実証された、とも結論づけている。」（田畑書店1990年4月第1刷）

このように、戦争への兵力を準備するために、非人間的な「精神衛生運動」を実施したりして、人々の精神病に対する恐怖心を煽った一方では、精神病に対する差別も正当化されていました。こうしたコンテクストを踏まえれば、早苗の母が兄の死の原因と父の狂死の事実を隠したことは理解しやすいのであります。

同時代読者の時間に即して考えますと、『秋の嘆き』の発表時点においては、現在からはやはり想像も及ばぬほど、精神病は人々にとって、深刻なものでありました。この年、1954年7月1日厚生省から精神衛生実態調査が発表され、「障害者総数130万人、人口1000対14.8、精神病45万人、精神薄弱58万人など」と言われています。（「WIBA93保健、医療、福祉の総合年鑑」日本医療企画WIBA編纂室）しかも、当時の「精神病」に関する常識では、1953年4月東京書院編集の『社会常識百科事典』の「医学の常識」欄によりますと、

精神分裂症 早発性痴呆ともいわれ多く遺伝による。急性のものは治りやすいが、慢性のものは何回もくり返しているうちに痴呆に陥る。孤独な性格の学者や芸術家に多く、病気が進むということや行動が突飛になり、幻聴、被害妄想幻覚がおこる。

というふうに解釈されています。

こうした時間相のもとでは、狂気の遺伝に恐怖を感じる作中人物と読者との距離はほとんどなくなっています。麻野の手紙に書かれていたように、「血統さえよければ異存がない」という彼の母の考え方は同時代の通念であります。結婚という制度の裏に隠れている血の遺伝への偏見が根強く残っています。早苗の内面における兄との結婚に関するやりとりが、現在と過去という物理的時間を越えて、作品の中に繰り返して書かれていますが、それは最終的に血の遺伝を恐れての兄の自殺と早苗の結婚を諦めざるを得ない現実とを浮き彫りにしています。

このように作品の水面下に沈められた現実の歴史上のドラマに通じ、その一方では同じく作品の水面下に沈められた狂気をめぐる時代の空気を共有する同

時代読者だからこそ、作中人物の呼び掛けに応えて、その気持ちに鋭敏に反応し、時間の再構成という作者からの課題に正面から取り組むことができるのであります。

討議要旨

国際基督教大学の畑中千晶氏から、福永作品の人称についての質問があり、発表者は、この人称の使い方は読者と主人公の距離を意識してのものであろう、と答えられた。立教大学大島真弦氏から時間構成の問題についての質問があり、発表者は、福永作品における時間の重要性を指摘された。